

序 文

ここに上梓する『長江流域社会の歴史景観』は、2008年4月から2012年3月まで4年にわたって、京都大学人文科学研究所東方学研究部において進められた「長江流域社会の歴史景観」共同研究班の研究成果報告論文集である。

長江は青海高原に源を發し、6,300キロにわたって兩岸を潤した後、大海に入る。その流域面積はおよそ180万平方キロ、日本のほぼ5倍に達する。そこに形成されてきた長江流域社会は、宋代以降、黄河流域にかわって中華世界の心臓部ともいべき役割を担うことになった。とりわけ、下流域に位置する長江デルタ地帯では、稲作を中心とした豊かな経済を背景に、人口の集中が進むとともに、優れた学術、文化を育む土壤が形成されてきた。

中国文明を理解するうえで重要な意味をもつ地域でありながら、長江流域社会全体に目を向けた共同研究は、これまでほとんど皆無に近い状態であった。4年間にわたる共同研究班では、このような長江流域社会がどのように形成され、どのように発展して近代世界と向きあうようになり、そして中国社会にどのような影響を及ぼしたのか、といったさまざまな問題を、人文学的、とりわけ歴史学的なパースペクティブから多角的に解明することをめざした。

この共同研究はまた同時に、人文科学研究所附属現代中国研究センターが人間文化研究機構との共同事業として推進している「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」というテーマの総合研究（2007年4月～2012年3月の5年計画）の一翼を担うプロジェクトでもある。今ある現代の中国社会は、どのようなプロセスを経て形成され、どのような基層のうえに築かれているのか、というトータルの課題に対して、その中枢部である長江流域社会に的を絞って、集中的な共同研究を進めることにしたのである。

このような方向性のもとに組織された研究班は、幸い多くの研究者に参加いただき、熱のこもった共同研究を進めることができた。ことに、関西一円の各大学に在籍する博士課程からポストドクターにかけての若手研究者が多数、積極的に参加され、若さ溢れるフレッシュな研究発表が相次いだことは、特筆に値する。

最初3年計画でスタートした本研究班であったが、長江流域社会をめぐる問題群が山積していて、到底3年ではまとめきれないという焦りが高まりかけていた矢先、たまたま班

長の定年退職が1年繰り延べされることになったのを奇貨として、1年延長して4年計画に変更し、研究成果のよりいっそうの充実をはかることにした。この期間、隔週金曜日の午後2～5時に設定した正規の研究班だけでも、総計で50回を超える開催が記録されている（詳細については、各年度の『東方学報』彙報欄を参照いただきたい）。この報告論文集に収録されている16編の論文は、4年間におよぶ共同研究のエッセンスともいべき成果である。各論文は便宜的に経済篇・社会篇・文化篇の三篇に分類し、各篇においては大雑把ながら長江の下流域から上流域への順で配列した。

ここに収録することができた研究成果のほかにも、非常に興味深い研究発表をいただきながら、論文作成の段階にいたって激務に就かれるなどの理由で、結局寄稿いただけなかった論稿も少なくない。学術雑誌など別の場で、その優れた研究成果が世に問われることを期待したい。

また研究期間中、中山大学歴史学系教授、桑兵先生、中国社会科学院近代史研究所研究員、汪朝光先生のお二人は、外国人客員教授として、それぞれ半年間滞在され、研究班に毎回かかさず熱心に参加して、本国の研究者ならではの的確で懇切なアドバイスをいただいた。お二人の多大な貢献に深甚の謝意を表する。

研究期間終了の後、班長が定年退職とともに遠隔地に転居したため、編集作業の多くは、小野寺史郎氏のお手を煩わせることになってしまった。また査読にあたっては、石川禎浩、小野寺史郎、森紀子の各氏に協力を仰いだ。併せて心より感謝申し上げる。

なお出版にあたっては、人間文化研究機構との共同事業「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」のプロジェクト経費を活用させていただいた。5年に及ぶ人間文化研究機構の息の長いご支援に厚く御礼申し上げます。

2013年9月

多摩丘陵の書屋にて

森 時 彦